

『緒戦』

「今日の戦況はどうかね？」

ケルマディク政庁の防衛委員会執務室に入るなりレーヴェンスは一人で窓から外を見ていたクラートンに尋ねた。クラートンには彼が入室してきた事に注意を払った様子は見えなかった。

「相変わらずだ。この五日間、同じ事の繰り返しだな。」

『城砦落とし』が出撃して十数体の悪魔どもを蹴散らし、相手の陣地の様子を窺って帰還する」

「それで状況は？」

「相変わらずだ。悪魔どもの数は増えているようだよ。ざっと見ても最初の三倍にはなっているだろう。」

「昨日、『城砦落とし』を殺そうとして待ち受けていた上級悪魔が一体、彼女にあっさり殺されて以来、連中は彼女に取り合うのをやめたようだ。本格的な攻勢は近いようだぞ」

「そうか、それは弱ったな。アンゲルウルプ方面も望み薄だ。」

どうやら悪魔たちは攻勢方向をアンゲルウルプに定めたらしい。諸族の軍勢を中核にすえて、侵攻を開始したと。おそらく諸侯勢の主力はそちらを迎撃に向かうだろう。こちらはこちらで何とかしなければならなかったという事だ」

それを聞いてようやくクラートンはレーヴェンスを振り返った。

ところが言葉とは裏腹にレーヴェンスの髭面はあまり弱った様子ではない。

「・・・何か新しい情報が？」

悪魔の軍団に包囲されたケルマディクでは外の様子はまったく解らない。

唯一の情報はアンゲルウルプの諸侯会議に出席している代表团からの、魔法使いからのテレパシー呪文による報告だけだ。

ケルマディク内の事はクラートンが、外部の事はレーヴェンスが統括している。

クラートンは同僚が何か明るい情報を持ってきたのかと感じた。

「近隣諸侯の反抗計画がまとまったそうだ」

「意外に早いな」

日頃感情を表に出さない正確のクラートンが僅かに片眉を動かした。

本当に驚いているのだ。友人の目立たない驚愕振りに満足したレーヴェンスは話を続けた。

「やはり、この辺り一帯に展開していた悪魔たちは、ケルマディク包囲に集結した様だ。」

周辺への侵攻はオークやゴブリンといった諸族が肩代わりしている。ホブゴブリンではない」

「なるほど」

レーヴェンスの言葉にクラートンは納得した。人間やエルフ、ドワーフたちと対立する諸族は数多い。

そしてそれぞれに人間や、エルフ、ドワーフたちにもあるように特性がある。

ホブゴブリンは秩序だった性向を持つ。良き軍隊の兵士として名高い。

条件さえ折り合えば人間の都市国家や諸侯の中にはホブゴブリンの軍隊を傭兵として雇う場合すらある。

契約を遵守し、ある意味信用がおけた。そしてそういう軍隊は手強い。

翻ってオークは臂力に任せた乱暴者ぞろいだ。
火付け、強奪、殺人を好み、無統制。

「ゴブリンも身軽ですばしいが、ホブゴブリンとは種族的に親戚筋でありながら秩序とか規律とかは無縁の存在だ。こそ泥と言った方が近い。そんなオークやゴブリンは遊撃兵かゲリラのように村落を荒らしまわる事得意とするが、組織だった侵攻作戦には不向きな種族だ。攻城戦など抜け道を探し出して潜入するのではない限り、ただただ肉薄して攻め寄せるだけだ。攻城兵器を使いこなし、集団戦を得意とするホブゴブリンとは違う。」

つまり城塞都市にこもってしまえば、オークやゴブリン相手ならそうそう遅れを取る事はない。

「ミルガン、ウーベン、ウエタクスの三諸侯が中心になって重装騎兵を集結させているそうだ。」

伯爵領、子爵領を一つづつしか治めていない中規模諸侯が集められる数などたかが知れているが、まあ朗報ではあるな」

「それで？」

「軍勢を二手に分けて、それぞれ補充する様に進軍してくるそうだ。」

途中でオークどもの襲撃にあつたとしても、もう一方が救援にくるといふ形らしい」

「両方同時に襲われたらどうするつもりなのかね？」

「さあ？その辺りはその辺りで、またなにかしら考えがあるのかも知れないがね。」

悪魔たちの攻勢が早いか、援軍の到着が早いか・・・」

「それなんだが、『城砦落とし』一人で敵陣をかき回すにも限度がある。」

先日の戦いで生き残った精鋭部隊の連中も何とか再戦の準備ができた。一つ、こちらから打って出ようかと考えている」

「できるのか？」

「日頃『城砦落とし』が一人でやっている事を十数人でやろうという話だ。逃げ足の速い者を集めている」

ボルメリアが毎日行っている事は、単独で悪魔の陣営に飛び込み、一しきり暴れた後、十何体か悪魔をつり寄せてケルマディクのもつとも堅固な城壁まで誘導する。

そして待ち構えた弓兵や魔術師の攻撃で、釣り込んだ悪魔達を攻撃する、というものだ。

彼女一人が毎日やっている事を十数人でやろう。そういう話である。

「それで時間が稼げるかねえ・・・」

「期待はできんが士気を保つ事はできるだろう。何もやらないで手をこまねいているよりはマシな」

他の者なら苦笑やら自嘲やらなしでは言えない言葉も、クラータンは淡々と話す。

変わりに笑みを絶やさないレーヴェンスが苦笑する。

「少なくとも見積もっても五千体の悪魔に包囲されているのだからな。まあやれるだけの事はやろう」

今のところ情況は絶望的だ。

下級の兵卒でも一体で人間の兵士の十数人分の戦力になる悪魔が五千体あまりでケルマディクを包囲している。実態としては五万以上の兵力に囲まれているようなものだ。

対するケルマディク軍の兵力は正規の戦闘員で一万余り、城壁を修復したり、武器や防具の修繕をしたり、後方で支援するものの数は数万人になる。

数だけなら悪魔の軍勢に匹敵するが、悪魔の戦闘力に対して比べられるものではない。今のところケルマディクが持ちこたえているのは、堅固な城壁と魔法防御陣、そして悪魔すら圧倒するポルメリアの戦果によって保っている人々の士気によるものだった。ケルマディク自体に状況を打開する方法は見い出せない。

それでもレーヴェンスもクラーテンも絶望していなかった。

戦いは最期の一瞬まで何が起こるか解らないものだと言っている。

彼らは乱世の『天使王国』を生きている商人だ。

荒っぽい事も、際どい勝負も初めてではないし、きっとこれが最後という訳でもないだろう。

だから、自分たちに思いつく事をこなしていくだけなのだ。

自らの努力を怠らなければ、幸運の女神の加護が訪れる事もあるだろう。

「では、『城砦落とし』たちに話をしにこう・・・」

そう呟いて部屋を出て行こうとしたクラーテンが不意に足を止めた。

不思議に思ったレーヴェンスが同僚を見る。クラーテンは真面目な顔で言った。

『『城砦落とし』に城壁の守りを託すとは、何とも皮肉な話だな』

「・・・本当にそう思っているのか？」

「いや、単なる冗談だ」

「だと思ったが、お前の顔は解りにくいからな」

「まあな」

クラーテンの後ろ姿を見送って、彼らの変わりにレーヴェンスは窓の外を見た。

空は不安げな曇天。今にも雨が降り出しそうだ。雨が降り出せば人々の士気にも影響する。

家屋を失った避難民が押し合って庇を求めて雨宿りするだろう。何とも気が滅入る話だ。

『『城砦落とし』の存在で、さて、いつまで士気を保てるだろうか。』

それまでに戦局が変わる事などあるだろうか？何か他に手はないだろうか？

レーヴェンスはぼんやりと、そんな事を考えた。

ウロロトスは次元界を流離う傭兵種族だ。主に『悪』の陣営に雇われる。

彼らの属性も『悪』だからなのだが、地獄の階級をあげようとか、

何もかも破壊してやろうとか、そういう目的意識を持つ事はない。

ただ自分たちの種族の繁栄を、『善』と『悪』、

もしくは『悪』対『悪』の戦争が渦まくこの多元世界で獲得しているかとしてに過ぎない。

傭兵といってもウロロトスは特に屈強な体格をしている訳ではない。

むしろ上級悪魔に比べれば貧弱だ。魔法の使い手としてもさほど高いレベルの呪文を使いこなす訳ではない。

彼らの売りは、高い精神感应能力だった。

相手に対して精神作用を起す事もなく、相手の考えている事、望む事を知る。

反射的に体を動かす戦いの達人相手ならともかく、訓練の行き届いていない素人相手なら無敵だ。だが彼らが得意とするのはそんな事ではない。

兵士達の望みを逸早く知り、或いは兵士達の望みを自分に都合よく変えていく。

それこそが彼らの能力だった。つまり軍隊の指揮官として使い勝手のいい力だと言える。

戦う兵士達の考えを、自分たち自身が望むのだと錯覚させた上で、コントロールしていくのだ。

細長い軟体動物を思わせる頭には、頭髮は一本もない。金色に光る眼球に瞼はない。鼻と呼べるものもない。口と思われる部分には蛸や鳥賊の嘴のようなものがあり、その周りには無数の触手が蠢いている。

手足は人間と同じ様にあり、背丈も人間とほぼ同じ。ただ頭部がそんな異形なのだ。

アンゲルウルプ攻めの主力であるホブゴブリンたちも、最初その異形を見て怯みはしたが、

しかしテレパシーをつかっつけて呼びかけるウロロトスの妙な説得力と感応力が彼らの不安を払拭した。

気がつけば、もともと軍律を重んじる彼らの軍隊が、より効率的になって動いていた。

アンゲルウルプへ向かう途中も行軍訓練の一環であり、重装備を担いでの行軍速度は日に日に増した。

それでも兵士たちは辛いとも苦しいとも不平を言わなかった。一日の終わりには必ず宿営地をつくる。

どんなに疲れていても堀や塀を完備した宿営地を建設するのだ。それで歩哨以外は安心して眠れた。

野営ではなくテントを張って塀と堀で守られた陣地をつくるだけで、

こんなに安心して眠れるという事をホブゴブリンたちは知らなかった。

宿営地の建設に慣れると言う事は、土木建築に慣れるという事でもある。

人間たちが撤収の時に落としていた橋のかけ直しも、驚くべき速さで終わった。

行軍をいたずらに続けた訳ではない。五日に一度は休みをとり、そしてその翌日には模擬戦を行った。

これがまた激しいもので、刃を引いていない鋼鉄の剣で、兵士達が本気で戦うのだ。

訓練が終わった後は打ち身でうめく兵士達で溢れるのだが、それらは治癒呪文を唱えられる者たちに癒してもらう。

最初は訳も判らうちにウロロトスに命じられた事をやっていたホブゴブリンたちだが、

元々軍隊気質の種族だけに、ウロロトスが自分達を精鋭の上にも精強な軍隊に鍛え上げている事に次第に気付いていった。

そして最初の本格的な会戦に勝利してからは確信に変わった。

このまま行けば、人間やエルフ、ドワーフらに成り代わり我々ゴブリン種、中でもホブゴブリンがテツラムリアの主人にもなれるだろうと。

ウロロトス率いる、ホブゴブリンを主力とした悪魔ルボレットが煽りたて召集した諸族の精鋭軍三万は、

アンゲルウルプと旧メルクスとの調度中間点、ミッテロという寒村があった場所で初めてのまとまった抵抗を受けた。

諸族側に紋章官などいないから敵軍の構成はウロロトスが捕らえた捕虜を精神捜査して調べるまで解らなかったが、

どうやらフォリヴァス家臣団を中核とした中原諸侯の連合軍であったようだ。

総数は一万前後。三分の一を重装騎兵が占めるという『天使王国』側としてはかなり主力級を集めた軍勢だ。

戦いは激闘で終始した。『天使王国』中原諸侯は豊かな領地から搾り取った豊富な軍資金を持っている。

金に物を言わせて整えた対悪魔装備で頭の花辺から馬にいたるまで固めた、きらびやかな重装騎兵が、

ホブゴブリンの重装歩兵が一糸乱れず並ぶ戦列に突撃を仕掛けたのだ。

雑兵相手の戦なら、重装騎兵の突撃に怯え、戦列を維持する事ができなくなり、あつという間に逃げ散ってしまう。

諸侯も騎士もそう考えて正面から、弓矢の雨を弾きながら突撃したのだ。

だがウロトスに鍛え上げられたホブゴブリンの戦列兵は違った。彼らは少しも慌てず、一直線に突撃してくる重装騎兵たちの進路から、すぐに逸れた。ほんの少し戦列の間隔をあけて重装騎兵の通り道をつくってやるだけなのだ。一体どういう事なのかと騎士たちが惑う間に馬が崩れ、騎士は大地に投げ出された。棍棒で馬の足を殴られたのだ。周りからはホブゴブリンの戦列兵が殺到する。

それでも騎士たちは怯まなかった。戦に名誉を求め、武勲に輝く誇り高き騎士たちは、重くて高価な装備を振るい、敵中で獅子奮迅の働きをした。だが、それだけだ。重装騎兵たちの突撃は、ほとんどかわされ、落馬して重装甲歩兵と化した騎士たちは激しく戦いながら、一人、また一人と命を落としていった。

ウロトスとしては中原諸侯軍が中央に突撃を繰り返す間に、両翼の自軍を展開させ、半包围陣形を取り、魔狼に乗ったゴブリン、空を飛ぶ魔獣に乗った諸侯の貴顕、悪魔たちに退路を断たせて、包围殲滅戦に持っていくつもりだったのだが、重装騎兵以外の敵兵の戦意は乏しく、激しい肉弾戦が行われた割には敵はあっさりと逃走していった。

ホブゴブリンたち諸侯の軍からすれば完勝である。彼らは喜びに沸いた。だがウロトスは首を傾げる。戦いそのものは激しかったが結果はあっさりとしたものだった。諸侯軍の損害も、ほとんど重装騎兵であるがたかが数百程度で、一万前後の兵力がすぐに逃げ出すほどではない。それに逃走というその逃げっぷりが、また迷いがなく、こちらが追撃戦に移行する前に軍を引いていた。

まるで突撃した重装騎兵達を生贄に捧げていっただけのような戦い・・・いや、転進ぶりだ。こちらに向かってきたのは陽動で、一体あたりの戦力は高くとも大隊規模で活動している悪魔の正規軍に主力が向かったのかとも思う。

悪魔の大隊は六百体だ。一体で人間十数人分の戦力になるとはいえ、所詮は六百体でしかない。同じ様な一万前後の軍隊と正面から戦えば、負けなくても大きな被害が出るだろう。両翼に展開している悪魔の正規軍が打撃を受けたら、諸侯の軍は孤立し、戦略的に包囲されてしまう。一路アンゲルウルプを突くこの作戦の最大の危険は敵中での孤立だった。

だが遠隔テレパシーを飛ばして悪魔の正規軍に問い合わせても、敵襲はなかったという。彼らにしても逃げ送れた老人や怪我人、病人の魂を刈るばかりで、戦いらしい戦いなどしていないという。

ウロトスは首を捻る。考えすぎだろうか。結局、先ほどのフォリヴァス家を中心とした諸侯連合軍を編成するぐらいが、アンゲルウルプの諸侯会議にとっては関の山なのだろうか？

それでもウロトスは念には念を入れる事にした。

ルボレットから兵力の増派連絡が来る。山岳地帯に住まう巨人族の一派を口説き落とすし、アンゲルウルプ攻めに合流させるといふのだ。城攻めが予想されるアンゲルウルプ攻略に、巨体から石を投げ、力任せに棍棒を振るい城壁を破壊する巨人達の参加は喜ばしい。攻城兵器とともに切り札となる。

ウロトスは戦勝を労い、宿営地を築いて巨人族の合流を待つ事にした。

まあ、敵が何を考えていてもやる事には変わりはない。万全の体制をウロトスは確立した。雇われ給金分の仕事を果たすだけだ。

のっぺりとした彼らの顔に表情は見えない。

瞼のない瞳が冷たく、喜びに沸くホブゴプリンたちの狂騒を、そしてその向こうのテッラムリアの荒野を見つめるだけだった。

ポルメリア一人だろうが、ケルマディクの精鋭部隊とともにだろうが、悪魔側が包囲を固め、ケルマディク側が小規模な出撃で小競り合いを繰り返す日常が過ぎて二週間がたった。

ケルマディク防衛委員会にとっては少しまずい雰囲気である。立て籠もる人々がこの情況に慣れ始めたのだ。

悪魔側は一向に攻勢に出る気配がない。毎日のようにポルメリアは出撃に、その度に十数体の悪魔を倒してくる。それだけの毎日が十日以上過ぎたのだ。流石に慣れによる安心感が出てしまう。

情況はちつとも変わっていないが、自分たちがその身に恐怖を感じるような激しい戦闘は、城外の、悪魔の陣営地でしか行われていない。人々が戦争を自分たちとは関係ないものと捉え始めている。

食糧配給に携わる者ほどそれを感じつつあった。

今までは長期化必至の戦いの最中、限られた食糧を配給制にして皆で分け合い戦い抜いていかなければならない。そんな意思の統一感があった。

だが一度身の危険を感じなくなると、閉じ込められている逼塞感から不平不満が出るようになる。真っ先に出るのは食糧だ。

難民達は分配される小麦粉が少ないと不平をこぼすようになる。

一般市民は、よそ者に何故自分たちも供出した小麦粉を与えなければならぬのかと不満を持ち、更に政庁に籠もって戦いを指導している富裕層にも文句を言い始める。

自分たちは貧しい食事で我慢しているのに、富裕層はもっと旨い物を食べているのではないか？それに、一向に戦況が好転していない。城外の悪魔を倒す有効な手立てを本当に考えているのか？

最初の攻防から数えて一ヶ月近くが経とうとしている。悪魔たちからの攻撃は絶えてない。

城内の空気が緩み、外に向かつて団結していたものが内側に向かって破裂、分裂する気配が沸き起こっていた。

それを鎮める力をポルメリアは持たない。

彼女は結局のところ自身が言うように剣でしかなく、『ワーム』が言うように『戦闘人形』であって、修羅場で絶大な力を發揮しても、人の心を思いやったり動かしたりする事は不得手なのだ。

そして不得手なことを考えても仕方ないと割り切れるほど、

彼女は単純でもなかった。ケルマディク城内の空気が悪化している事は気付いている。

自分に対する視線も期待と尊敬から、不満げなものが増えている事を察している。

悪魔を叩くなら、もっと効果的に攻撃して包囲網を潰せと、それらの視線は言っている。

彼女とてできればそうしたい。

だが悪魔の軍団は人間やドワーフのそれよりも遥かに軍律が厳しく、鉄の団結を誇る。

出撃の度に十数体の悪魔を滅ぼしていくポルメリアは目障りな存在だが、その彼女を恐れる余りに戦列を崩したり、包囲網を弱めたりする事はない。守りを固められたら、十数体を倒したところで揺るぎもしないのだ。

ただ毎日出撃していて救いはある。悪魔の増援が一定数から増えていないのだ。

今以上情況が悪化していない。それだけが救いだっただけだ。

「しかし、これ以上悪くならないからといって座視するのはまずい。情勢の変化が良くなる兆しは、まだないからな」

例によって防衛委員会の部屋にレーヴェンスとクラアテンがいる。

他の委員が集まる前に二人で打ち合わせをするのは、いつもの習いだっただけだ。

「悪い知らせがあったのか？」

外部情報の整理と交渉はレーヴェンスの役割である。クラーテンの質問に彼はうなずいた。

「ホブゴブリンを主力とする悪魔側に組する諸族の軍勢三万余りと、フォリヴァス公の配下の騎士を中心とする諸侯勢一万が接触した。

激闘だったらしいが諸侯軍は敗走。敵は一路アンゲルウルプを目指している。

中原の諸侯がケルマディクに注意を向ける事は当然あるまい」

「ミルガン伯が中心になって集結しているという軍はどうなのだ？」

「イスリスの聖騎士団が参加する事になって目鼻がついたようだ。それでも重装騎兵は千に満たないらしいがな」

太陽神の聖地、イスリス・ボルへには太陽神を信仰する不死の怪物退治をもっぱらとする聖騎士団の本部がある。

善なる軍神の聖騎士団と並び称される武勇を持つが、

魔獣や怪物全般を相手にする軍神の聖騎士のように荒野での騎馬突撃を得意とする訳ではない。

身近なところでは墓場荒らしや、邪教徒、

邪な考えに取り付かれた魔術師によって作り出されたアンデットと呼ばれる不死の怪物を倒す彼らは、

どちらかというど街中や迷宮など閉鎖された環境で戦う事が多い。狭い迷宮や屋内で騎馬突撃などとする騎士はいない。

それは強力な魔物への攻撃手段は、騎馬突撃に勝るものはないと考える一般人にとって、

喜んでいいのか悪いのか、微妙な援軍と言えた。

「悪魔祓い、悪魔退治は聖職者の十八番とも言うが、生半可な呪文など悪魔たちに効かない事は我々も良く知っている。イスリスの聖騎士団は大丈夫なのかね？」

クラーテンは尋ねるが、レーヴェンスは両手を上げる他ない。

「さあな。君は奥方が寵の女神の祭祀長だから、多少は知っているかも知れないが、私にとっては神だの呪文だのは専門外だ。とにかく、何者でも構わないからケルマディクを救出して欲しい。それだけだよ」

「それで、ミルガン伯は何時こちらに到着するの？」

「早くても一週間後だそうだ」

「早くて、か」

クラーテンの顔色は変わらない。レーヴェンスも微笑みを崩さない。

だが二人には互いに考えている事が手に取るように解っていた。この一週間を持ちこたえられるかどうか、それだけが勝負だった。しかし市内には長期化し変化に乏しい籠城戦に飽き、緊張の糸がほぐれるにつれて、不穏な空気が漂い始めている。手綱さばきを誤れば暴動が発生し、悪魔たちに座して勝利の果実を渡しかねない。

レーヴェンスは尋ねた。

『『城砦落とし』はどうしているの？』

「良くやっているよ。だが所詮戦う事に特化した十六歳の小娘だ。器用な腹芸などできんし、その才覚もない。生真面目なのだな」

「なまじ英雄肌でない事を歓迎したが、今となっては残念な事だ。

人を乗せたり、誤魔化したりできる才能があれば、市民の士気を保つ事もできただろうに」

「嘆くな。そこまで彼女にやってもらっては、我々は無用の長物と評価される。それはそれとてまずい。革命の火種になる」

「事態打開に何か考えねばならん、か」

「それとも一週間、息をひそめるか」

「成り行き任せは好きじゃないな」

レーヴェンスの言葉にクラートンは呆れたような溜め息をついた。

禿頭に僅かに残った髪も白髪なのでクラートンはレーヴェンスよりも年上に見られるが、実のところ二人は同じ年だ。髪は自前でもレーヴェンスは魔法の染料で髪を染めている。

長い付き合いだから解っているが、レーヴェンスは陽気で前向きな男だ。常に自分から動き出さなければ気がすまない。慎重なクラートンとは性格が違う。

だから長い付き合いをしていられるのかも知れない。

「とにかく市民が暴発する前に何か手を考えよう。それまではなんとか宥めてくれ」

「我々も市民と同じ物を食べているとか、難民や負傷者の慰問に行ったりするのが関の山だな。手すきの人当たりがいい者にやらせよう」

「君がやったらどうだ？」

レーヴェンスが悪戯っぽく言う。クラートンは眉間に皺を寄せた。

「ワシが？」

しかめっ面のクラートンは自分が奥方以外のほとんどの人間にとって恐れられている存在だという事を承知している。レーヴェンスの提案は無思慮なものに聞こえる。言ったところで誰も励まされたり、慰められたりはしないだろう。

だが少しばかり考え込んだクラートンは意外にも首を縦に振った。

「いいだろう。最近現場にも出ていないから、雰囲気を探るだけでも意味がある」

「よろしく頼む。その間にこちらは何か考えるところでしょう」

翌日から怪我人や難民を慰問して回り、前線の兵士たちを激励して回るクラートンの姿が見られるようになった。ところがそれが予想外に評判が良かった。

クラートンの奥方が竈の女神の祭祀長であるのは知れ渡っている。

あの方の夫が出てきたのかと怪我人も難民も興味本位でクラートンの一行を見守った。クラートン自身は仏頂面のままだ。だが彼は衣服が汚れるのも厭わず歩き回り、怪我人や難民、兵士達に不足な物を尋ね、連れ歩く書記に日々書き留めさせ、善処する事を約束した。そして立ち去る時は必ずこう言ったのだ。

「諸侯と太陽神の聖騎士たちがこの街を救う為に動き出している。もう少しの辛抱だ。ここを乗り越えれば全てが終わる」

大仰に熱弁を振るう訳でもなく、哀願するでもなくクラートンは淡々と述べるだけだ。それが却って真実味を感じさせた。

それに諸侯はともかく太陽神の聖騎士団は勇名轟いている。

不死の怪物相手に戦う彼らなら悪魔相手に遅れをとることもないだろう。そう人々は感じた。

それに不足なものを訴えた人々の願いは、遅くともクラーテンが訪れた翌日までには届けられた。

飲み水が不足であるなら飲み水が、包帯や薬が不足ならばそれらが、流石に食糧が運び込まれる事はなかったが、お湯を沸かして風呂を使う事は推奨された。

意外にもそれで人々の不平は鳴りを潜めたのだ。おそらく人々は誰かに不平不満を言いたかったのだろう。

クラーテンは確かに愛想がない。しかし人々の愚痴に口を挟まず黙って最後まで耳を傾けた。

無茶な要求以外は全て叶え、叶えられない願いは、はっきりと拒絶した。

それでも富裕層が旨い飯を食っていると文句をつける者たちは直接政庁へ連れて行ったのだ。

誰もが同じものを食べている。

皆小麦とチーズのポタージュで我慢していると知ると、文句を言った者たちは不承不承引き上げた。

もちろん実際はどうか解らない。一部の大商人たちは屋敷の中で隠れて旨いものを食べているのかも知れない。

だが少なくとも政庁で働いている者たちは、市民に配給している食糧と同じ物しか食べていない。

それを直接見れば、振り上げた拳を下ろさざるをえなかった。

ポルメリアはそれをただ黙って見ていただけだ。彼女は兵士だった。そしてそれ以上に剣だった。

戦う事しかできない。荒んでいく人々を見て心を痛め、クラーテンたちによって鎮められていく人々を見て安堵する。

この件に関して彼女は無力なのだ。

「それで儂の工房で行ったり来たりしているだけか」

アルベルバルが熱くなった刀身を打ちながら、傍らの椅子に膝を抱えて座っているポルメリアに尋ねる。

最近の彼女は悪魔の陣営に突撃して帰還する以外は、馴染みの魔法鍛冶師、ドワーフのアルベルバルの工房に入り浸っている。

孤児院の子供たちですら廃材を集めたり、怪我人の世話をしたりと忙しい。

攻撃の時にポルメリアとともにあり、その士気を鼓舞する歌を歌うディエスは治癒魔法を使って怪我人を癒す為に働いている。騎士でありながら飛び込みの戦士である彼女には指揮すべき部下はいない。

他人を励ますなんて事も、できそうもなかった。

城壁の修理を手伝う事も考えたが、淡い光を放つ天使の眷属である彼女を見物しようとする人たちが集まって、仕事にならなかった。

だから戦う時と休む時以外、彼女はアルベルバルの工房に佇んでいる事が多かった。

最初は持ち金全部と愛用の剣さえ担保に入れて発注したより強力な魔法の剣の製作を見守るという理由を口にしていたが、今となつては、居場所のない彼女が時間潰しに来ている事は明白だった。

「そうね。それしかできないみたい」

半地下の薄汚れた工房は天井近くに空いている採光窓からしか光が入ってこない。

そんな中で自ら淡い光を発する彼女は、存在自体神秘的で神々しく見える。

彼女の視線は採光窓の向こう側に向けられていた。背の低いドワーフ用の居住空間だから天井もそんなに高くない。椅子に座った彼女の目線からも外の様子は見えた。藍色の瞳はアルベルバルの作業などまったく見ていない。

さつきから窓の外ばかり見ている。

「前に比べれば、ちったあ明るくなったと思つたが、お前は相変わらずだな」

アルベルバルは作業に没頭している様に見えるながらポルメリアに話し掛けている。

「そうね。そうかもしれない」

彼女も彼もまったくお互いを見ずに会話を続けた。

「戦う事しか能がない、か」

「剣を振るうしか、できる事がないのよ。今はただ、それに迷いがなければ」

「何故だ」

迷いが無い事はいい事だ。だが逆にアルベルバルはその事の質問した。

以前のポルメリアは自分がやっている事を悩み疑い、迷いながら戦っていた。それがなくなったのはどういう事なのか。彼はそれが聞きたいらしい。

しばらく間があいた。アルベルバルは答えを促さずに鈍で剣を鍛え始めた。

薄暗い闇の中に、炉と、剣と、火花と、そしてポルメリアだけが光を放っている。

赤々と灯る炉、赤く焼けた刀身、赤く飛び散る火花。幻想的な光景には見向きもせず、そしてポルメリアは呟いた。

「私の剣は、テッラムリアで生きる者を殺す為にあるんじゃない。

私が戦うべきなのは、『悪』というよりも悪魔なんだと、そう理解したの」

「ゴブリンやコボルトどもも殺すべき存在じゃない、か・・・」

ドワーフは鋳夫であり鍛冶である。貴金属を取り扱う事が多い種族だ。

こそ泥を種族的職業にしているゴブリンやコボルトたちとは種族的敵対関係にある。

ぶっきらぼうに尋ねたアルベルバルにポルメリアは微笑んだ。

「同じ世界に住んでいる、同じ仲間よ。生きている者の魂を糧とし、通貨とし、力の源にしている悪魔たちとは違う。

まだ、住み分ける余地がある」

「どうか？ゴブリンたちは小さな子供や家畜をさらっていくぞ。それでも許せるのか？」

「問答無用で私達を滅ぼす存在では、ないのだから」

打ち上げた刀身を水に入れる。高熱によって生じた水蒸気と激しい水音が二人の会話に、文字通り水を差す。

音が静まるのを待ってポルメリアは言葉が続けた。

「同じ様に子供の誕生を喜び、同じ様に成長し、同じ様に怒り笑い、そして仲間の死を嘆く。

その生き方は程度の差こそあれ私たちと同じだ。私たちは同じ世界を生きる仲間。私の力を振るうべき相手じゃない。

殺し尽くして、いい相手ではない」

「悪魔なら容赦はいらないか。確かにそうだな。

だが、こんな事を考えた事はないか？

何故、『善』と『悪』は、悪魔と天使はこんなにも長い長い間戦い続けているのか、と。俺たちにはその理由を知る術はない。

ひよっとしたら戦っている当人たちも忘れちゃっているのかも知れない。いくつあるか知れない多元世界は全て戦いに満ちている。

愛を説く善神すらも『悪』との戦いは容認する。何故『善』と『悪』は互いを全否定するのだろうと」

アルベルバルは冷やした刀身を見ている。ポルメリアの返事はなかなか返ってこなかった。彼はそれを急かす事もせず、ただ作業に没頭しているように見える。

不意に、ポルメリアが問い返した。

「ねえアルベルバル。微笑みながら亡くなった人を知っている？」

「どうしてそんな事を聞く」

「私に見てきた死は、ほとんどが悲しみや絶望の末に容赦なく襲い掛かったものだった。

誰も彼も、失われる自分の命を惜しみ、悔やみ、後悔していた。私が殺した者たちは例外なくそうだった。

でも、私は二人だけ、微笑みながら死んでいった人たちを知っているんだ。

貴方は、そんな人を知っている？」

「儂の祖父さんだな」

アルベルバルは間髪いれず答えた。

「祖父さんは氏族でも指折り数えられるほどの魔法職人だった。

『ゴブリン殺し』はもちろん、『龍殺し』、『巨人殺し』、さまざまな名剣を打ち上げた。

他にも見事な鎧、素晴らしい独創的な魔法の道具の数々……まあ憧れの人だったな。

祖父さん最後まで鎚を振るっていてな、最後に仕上げたのは、ゴブリンの大部に襲われた氏族の危機に、氏族を守る為に立ち上がった老族長の鎧でな、族長は祖父さんの親友だった。

祖父さんは親友を守り、氏族を守る為に魂を込めて精強な鎧を造り上げた。

よっぽど満足だったんだろうなあ。不眠不休で十日間鎧作りに没頭した祖父さんは、満足そうに微笑んで力尽きた。

祖父さんの鎧は祖父さんの願いを叶えた。族長の鎧は今じゃ、その孫が使っている。祖父さんは今も氏族を守っている。

だが、儂の質問とこの質問、何の関係があるんだ？」

当然過ぎるアルベルバルの問い。ポルメリアはくすくすと声を立てて笑っていた。

「アルベルバル……戦いに意味なんてないのよ。ある者が他人が持っているものを奪おうとする。

財産だったり、仕事だったり、恋人だったり、命だったり、それは様々。奪われる者も黙ってははいない。

守る為に戦う。つまるところ、戦いと言われるものはそれだけの事。戦いそのものに哲学なんてありはしないし、悪魔はもちろんの事、天使達だって深く考えているかどうか解らない。

相手を全否定するのは、その方が都合がいいからでしょう。私には、そう思える」

「……随分冷めた物の見方をするようになったな」

「そうね、たぶん、戦いそのものよりも、もっと大切な事を見つけたからじゃないかな。

死の間際に、何故微笑む事ができたのか、今まで私は理解できなかった。

でも貴方のお祖父さんの話を聞いて、ようやく理解できた気がする。

貴方のお祖父さんは悔いのない人生を送ったのね」

「たぶんな」

「人にとって本当に大切な事は、そういう事じゃないかと思う。」

私の目の前で微笑みながら死んでいったイリネアもトウルスも、美しい死に顔をしていた。二人はきつと自分がした事に心から満足して死んでいったのだと思う。

できる事なら、私もそうありたい」

アルベルバルは思わず振り返った。ポルメリアは彼の方など向いていなかった。

ただ、その透き通るような微笑を浮かべて、何の悲壮感もなく、淡々と彼女は佇んでいた。

採光窓から黄昏の光が入ってくる。物言わず彼女を見守るアルベルバルに振り返りもせず、彼女は立ち上がった。

「剣ができあがるのは何時？」

彼女の言葉で我に返ったアルベルバルは少し慌てて、それを隠すように咳払いをした。

「後、二日は欲しいな」

「間に合わないか」

「何が、だ」

「悪魔たちはケルマディクの市中に混乱を起す事に失敗した。だから力攻めを再開すると思う」

「クラーテンの旦那たちが陣中見舞いしたら市中の不平が鎮まっていたという、あれか。あれ、悪魔の仕業だったのか？」

「さあ？でも、もし違うとしても、そろそろ悪魔たちも攻撃準備を整えたと思う。」

私が一人で陣営をかき回したところで、大した被害にはなっていない。

私が戦い、ケルマディク城内がそちらに気を取られている間に、どうも上空から何かケルマディクを見ていたような気がする。ケルマディクの防衛状況を確認して、作戦を立て、手順を確認して、そろそろケルマディクを落とす為に最後の攻勢を始めると思う。

私にできる事は参戦している上級悪魔を片っ端らから始末していく事ぐらいだ。

頼んでいる剣ができあがれば、効率良く倒す事ができるのだけれど、少し難しいようね」

「そうか、間に合わんか・・・」

心なしかアルベルバルは肩を落とす。彼は数十年に渡ってこの都で魔法鍛冶師を営んできた。

偏屈だが腕がいいと評判をとり、ポルメリアを始め馴染みの客もできた。

気難しい彼だが居心地の良くない場所に長年住み続ける筈もない。彼はこの巨大な商業都市を愛していた。

その存続が危ういと知れば気落ちするのも仕方ない。

以前ならポルメリアは、その事に心を痛め、自分一人で全てを背負い込み、死力を尽くして戦おうと悲壮な決意を固めただろう。

だが、ようやく振り返った彼女の顔には、透明な微笑みがあった。

「大丈夫。まだ望みはあるよ」

「気休めか？」

「まだ発表されていないけど太陽神の聖騎士団が援軍としてやってくる。彼らが上手くやってくれば、あるいは」
「あるいは、か。頼りないもんだな」

「でも、絶望していられるほどの事じゃない。僅かな望みさえあるなら、私は戦う。

それ自体には意味がない。でも私が戦う事で、皆が希望を持てるなら、そこには意味がある。だから戦う。アルベルバルも、望みがあるうちは剣を鍛えてね。ひよっとしたら間に合うかもしれないし。

それじゃあ」

ポルメリアが去ると急に工房から光が失われたように感じた。

確かに彼女は変わったのだろう。かつては生きる事、戦う事に意味を見出せずに苦悩していた彼女は、自分の戦う姿が人々に希望を与えると知り、喜びを感じているのだ。

自分の生きた人生に満足を感じて死にたいという。

「小娘が生意気言っな」

密かな苛立ちを感じながら、アルベルバルは作業に戻った。

今は何も考えるな。悪魔の攻撃があったからなんだというのだ。依頼された仕事は完璧にこなす。

それがアルベルバルの矜持ではないか。

彼はポルメリアに感じた苛立ちを振り切るように鎚を振るった。

結局のところ戦いから離れられない彼女を哀れむ。その感情を抑えながら鎚を振るった。

飛び散る火花が彼の老いた顔を映し出す。苛立ちながら、彼は涙を流した。

ポルメリアの予感的中した。悪魔たちはその翌日に猛然と、ケルマディクの全ての城壁に対して総攻撃を開始したのだ。城壁が破損していない場所には人造の巨像などを投入し、自分たちを退ける魔法陣を編み込んだ城壁の破壊を目指す。修理途中の場所や城壁は修繕しても魔法陣を巡らせる事ができなかった場所には悪魔の兵卒が殺到した。

かつてない大規模な全面攻勢だったが、ケルマディク側は怯まなかった。

ポルメリアの報告で魔法の石造り巨像の存在を知っていた彼らは、それを破壊する高価な魔法矢を用意し、弓手を配置していた。おかげで巨像たちのほとんどは城壁に辿り着く前に破壊されている。

魔法陣が壊れている場所への攻撃にも冷静に対処していた。

『善なる』応急の魔法陣を幾重にも張り、相手の動きが鈍くなったところを魔法の武器や呪文で攻撃する。

だから最初の頃は激戦が続いた。だが今回の悪魔たちの攻撃は数が違うのだ。

ほぼ五千体の悪魔、全てをこのケルマディク攻略投入している。悪魔を倒せない事はない。だがきりが無いのだ。

ポルメリアはもちろんの事、獅子奮迅で戦い続けた。前線に出てきた上級悪魔を見つけるとや否や、数撃の立ち合いで倒している。彼女を警戒して上級悪魔の方が彼女を避けているぐらいだ。

しかしやはり数の違いは如何ともしがたかった。

「ディアスはポルメリアの行くところ、何処にでもついていく。」

彼の歌で彼女は力を増し、無人の荒野を行く如く、悪魔の群れをなぎ払う。だがそれも彼女がいる場所だけだ。一度押し返し、悪魔達を追い散らしても、別の戦場に彼女が移動すれば、悪魔たちは嬉々として再度押し寄せてくる。全てその繰り返しだ。

戦いは早朝から始まり昼が過ぎても続いた。

悪魔たちは本当に今日をケルマディク最後の日にするつもりで、休みなく攻め立てていく。

ケルマディク側も粘り強く戦った。城壁が残ってる部分では、それを盾にして攻め立てる悪魔たちに抗い続けた。

しかし、疲れを知らない悪魔たち相手に、普通の人々が同じ様に戦い続ける事は不可能だ。

次第に疲労の色が濃くなり、少しづつ、少しづつ、人々は力尽き悪魔たちの餌食になる。

そして絶望的な知らせがポルメリアの耳に届いた。

「城門が破られたぞー！」

ケルマディクの城壁の中で、塔を二つ備えた城門は最強の守りであると言えた。

防御に適した立地、魔法陣を幾重にも張り巡らした備え。どれもこれも城門以上に配置されている場所はない。

その最も防御力の高い城門が破られたとなれば、人々が衝撃を受け、混乱するのも止もう得ない、とポルメリアは感じた。

だが、それで納得する訳にはいかなかった。浮き足立つ人々は簡単に悪魔たちの餌食になってしまう。

ポルメリアは戦いながら、咄嗟に叫んでいた。

「内城まで、万神殿まで下がりなさい！そこで迎え撃つ！」

その言葉をどれほどの人が聞いたのか定かではない。逃げ惑う人々を逃がす為に騎士たちは絶望的な抗戦を続けていた。そんな彼らを逃がす為にポルメリアは一人で戦場を駆け巡る。戦える者をむざむざ殺す訳にはいかないのだ。

「万神殿へ！」

悪魔達を粉碎しつつ人々を誘導するポルメリア。その時、彼女は自分を力づける歌がまったく途切れていない事に気がついた。振り返れば必死の顔でディアスが歌い続けている。

「ディアス、貴方も逃げなさい」

ディアスは答えなかった。ただ無理矢理微笑ながら首を横に振った。

ポルメリアは一人で悪魔の只中に残り戦い続け、一人でも多くの人を内側の城壁内へ、

そして神々の神殿が集まる万神殿へ逃がそうとしている。そんな彼女を放っておいて彼が逃げられる筈がなかった。

ポルメリアの顔が一瞬曇った。

だが次にディアスに襲い掛かった悪魔を一体滅ぼした時には、ディアスと同じように無理矢理微笑んでいた。

「じゃあ、最後まで付き合って。私の歌い手さん。私の戦い様を見届ける為に」

歌いながらディアスはうなづいた。そして怯えながらも自分の行為に満足していた。これでいい。彼女の側で死ねるなら、それでいい。

二人が決死の覚悟をして立ち回りを再開した時だった。破られた城壁の向こうから形容しがたい声が響いてきた。人の声ではない。恐らく悪魔たちの悲鳴だろう。

全ての言語を理解するポルメリアだったが、悪魔たちの声が余りにも混乱していて、すぐには聞き取れなかった。

足が止まった悪魔達をなぎ払うポルメリア。

その彼女に、今までかなわないと知りながら襲い掛かってきた悪魔たちが、急に怯みだした。

そして二人は絶望的な今の状況に似つかわしくない喜びの声を聞いた。

「太陽神の旗だ。援軍だ！」

同時に悪魔たちが掃討戦をやめて城壁の外へ向かっていく。

戦列を崩し成す術もなく逃げ出したケルマディクの軍など放っておけばいい。

新たに現れた敵軍を粉砕すべく悪魔たちは移動し始めたのだ。

空に蝙蝠に似た翼を持った赤い巨体の上級悪魔が飛び上がっていく。その数は五体。

ポルメリアにはかなわなくても、新手の人間の軍勢に突っ込んでいって、

悪魔が自分を中心に炎の爆発呪文を使用すれば、何十人が即死し、折角の援軍も隊列を乱して混乱してしまう。

そうならもう勝ち目は無い。

そう判断したポルメリアは一緒にいっていきと答えたディエスをそのままにして空中に飛び上がった。

ディエスの命も大切だったが、人間に対して圧倒的な破壊力を持つ上級悪魔たちを、

太陽神を旗印とする援軍の中へ飛び込ませる訳にはいかなかった。

彼女は銀の閃光となり五体の上級悪魔たちに突っ込んでいく。

最初の突撃で一体が瞬時に霧散した。上級悪魔たちもここに至ってはポルメリアを避け続ける訳にはいかない。

一体だけが人間たちの援軍迎撃に向かい、残りの三体が連携してポルメリアに襲い掛かる。

ポルメリアにいいように倒されてしまう部下を幾らぶつけても戦力の浪費に過ぎないと判断したのだ。

それよりも部下たちを、彼らでも脅威になる人間の兵士たちに向かわせる方が効率がいい。

一体が巨大な両手剣を、一体が炎の鎖を、もう一体が巨大な薙刀を手に襲い掛かってくる。

流石のポルメリアも三体が連携して、それも空中戦を挑んできたのではなかなか相手に致命傷を負わせる事はできない。

それに彼女は妙な事に気が付いた。炎の鎖を使うものは彼女を牽制するだけだ。

そして彼女とともにある浮遊盾を封じ込もうとする。残りの二人は力一杯の大振りを繰り返す。

まるで鎧ごとポルメリアを真つ二つにしようとするように。一体一ならそんな大振りな攻撃など簡単に避けられる。

だが上級悪魔たちは上手く呼吸を合わせて追い詰めていく。

避けたり鎧で相手の打撃をかわす事ができずに、彼女は咄嗟に愛剣で受け太刀をとった。

だが上級悪魔の両手剣の攻撃を受けた時に彼女は、ようやく相手の意図に気付いて舌打ちをした。

上級悪魔たちは最初からポルメリアの剣を狙っていたのだ。銀色の破魔の剣は、巨大な悪魔の剣によって粉砕された。

彼女が悪魔にとって恐ろしいのは、その剣技の冴えによる。

その剣自体を奪ってしまえば、彼女は悪魔を滅ぼすに足る攻撃力を失う。

そうならしまえば時間をかけて殺す事すらできる。

だが武器を失っても彼女は両拳や足をつかって巧みに上級悪魔たちを牽制する。

どれほどの援軍がやってきたのか彼女は知らない。しかし太陽神の旗印の下にやってきたとなれば、

太陽神の聖騎士たちが軍勢の中核である筈だ。

不浄なる者たちを打ち倒す為には戦う騎士たちならば、時間を稼げば悪魔の軍団を撃破できるかも知れない。

それだけが望みの綱だ。

とはいっても小柄な彼女に比して上級悪魔は巨体を持つ。いつまでも素手で相手をしきれものでもない。いや彼女にとつて最悪な事は、これ以上、上級悪魔たちを太陽神の聖騎士たちを迎撃する為に向かわせてしまう事だ。今まさに彼女は二体の上級悪魔に追い詰められ、一体の離脱を許そうとしている。飛び去る上級悪魔に対して、ポルメリアは何の手も打てない。

私は負けるのか。ケルマディクの町を、孤児院の子供達を守る事ができず、ここで力尽きるのか？

その時、彼女の耳元で聞き覚えのある唸れた怒鳴り声が聞こえた。

「下を見ろ、『城砦落とし』！間に合わせてやったぞ」

上級悪魔たちの相手をしながら眼下のケルマディクを一瞥する。何か鋭く光る白金色のものが視界に入った。だがそれが何かを確認する余裕など彼女にはない。

「受け取れ！」

唸れたアルベルバルの声が耳元で響く。何かが飛んでくる。

ポルメリアは上級悪魔が放つ巨大薙刀の一撃をあえて受けた。そして地上から飛んできた白金の何かを受け取る。

それが何なのか確かめない。だが柄を握ると不思議と手に馴染んだ。

二撃目を繰り出す上級悪魔。その薙刀を潜り抜け相手の懐に飛び込んだ彼女は一閃を振るった。

一撃だ。一撃で上級悪魔は悪夢の様に消えた。

驚く間もなく炎の鎖が飛んでくる。それを彼女は撃ち落とす。

繰り返し炎の鎖が彼女に迫るが、彼女はそれを全て打ち払いながら上級悪魔に迫った。

こんなに剣が軽く感じられた事はない。こんなに自在に操れる両手剣など、今まで扱った事がない。

何年も使い続けた、砕かれた愛剣でさえも、今、彼女の手の内にある白金の両手剣に比べれば、なんともどかしい武器であっただろうか。

完全に自分の間合いの内側にポルメリアに入り込まれて、上級悪魔は慌てて炎の爆炎で自分自身を包んだ。

だが今更だ。彼女の一振りで、やはり上級悪魔は消えた。

改めてポルメリアは手にした剣を見る。

悪魔殺しの天界の白金を鍛えてつくられたその剣には、善と冷気の力と、悪魔と龍を滅ぼす力が込められている。

彼女がアルベルバルに注文した品だ。彼女は注文以上の出来となった剣を眺め満足そうに微笑むと、

地上にいるだろうアルベルバルに合図するかのようには手を振って見せ、そして新たに手に入れた剣と浮遊盾を携えて、今まさに太陽神の聖騎士たちと悪魔たちとの間で行われている決戦の場に飛び込んでいった。

ケルマディク攻めの最中に後からイスリス・ボルへの聖騎士を主力とする諸侯の連合軍に襲われた悪魔の軍勢は、

やはり混乱していた。そしてその混乱の最中、ポルメリアによって残る上級悪魔全てを倒された事も、

それに拍車をかけた。援軍の襲来はケルマディク側に立ち直りの時間を与え、

最終的に悪魔の軍勢は諸侯連合軍とケルマディク軍によって挟み撃ちにされ、日没まで戦ったのち、闇に紛れて撤退を計った。

夜明けから日没まで続いた激闘にケルマディクは勝利を得たのだ。

だが諸侯軍とケルマディク軍はともかく、太陽神の聖騎士たちとポルメリアは日没になっても戦いをやめなかった。

普通の人々と違い、ポルメリアには闇を見通す目が、聖騎士達にも呪文によって夜の闇を見る力がある。彼らは悪魔を『撤退』ではなく『敗走』させなければならなかった。

本格的な追撃部隊を編成するまで、悪魔たちに再度のケルマディク攻撃を企図させてはならない。この一戦で彼らは決着をつけるつもりだったのだ。

ポルメリアと聖騎士たちは夜明けとともに帰還した。

闇に紛れて逃れた悪魔達を見つける事ができなくなるまで追撃して粉碎したのだ。

悪魔たちが再び集結してケルマディクに来襲しようとしても、更なる時間を要するだろう。

イスリス・ボルへの聖騎士団長は、そうケルマディクの市民に報告した。

人々は歓喜の声を上げた。ようやくにして自分達を苦しめた悪魔たちを退ける事ができたのだ。これを喜ばずにいられようか？

一晚中ポルメリアの安否を気遣って眠れぬ夜を過ごしたディエスを始めとする孤児院の子供たちも喜びの歓声をあげた。

しかしポルメリアは子供たちに気付いて笑って手を振ったが、政庁の役人に呼び止められて、そちらの方へ行ってしまう。子供たちは残念そうな声を上げた。それだけでとどまらなかったのがディエスだ。

彼は戦勝に沸く大人たちをかき分け、政庁へ入っていく。ポルメリアの跡を追いかけた。

政庁の中は喜びの混乱に沸いている。何食わぬ顔で入っていくディエスを見咎める者はいない。

役人に案内されてポルメリアは政庁の奥まった一室に入っていく。

ディエスは床敷きの絨緞に足音をしみこませながら近付き、扉に耳をつけた。

よく通る大人の男の声が聞こえてくる。防衛委員長のレーヴェンスだ。

彼はポルメリアに感謝の言葉を述べながら、続けてこう切り出した。

「実は・・・アンゲルウルプから援軍の要請がありましたな。

これはずっと伏せていた情報なのですが、今、敵の主力は一路アンゲルウルプに向かって進撃中なのです。

途中でフォリヴァス公配下の重装騎兵を主力にした諸侯連合軍が迎撃したそうですが、失敗。

壊走は免れて敵の追撃を振り切ったものの、つかず離れず敵はこれを追いかけてきているようで、じきにアンゲルウルプを指呼の距離に収めるようです。

今、トマス・ウォレンサー公が新たな軍勢を再編して迎撃すべく使者を遣わしているようですが、それがこのケルマディクにもやってきた、という訳ですな。

しかし卿もご存知の通り、今のケルマディクにはアンゲルウルプの期待に答えられる軍勢はありません。

諸侯やイスリス・ボルへの聖騎士団の力を借りなければ、逃走した悪魔の軍勢の追撃すらできない。

そこで、厚かましいお願いとは思いますが、

卿にケルマディクの名代としてアンゲルウルプへ行っただけなかと、こう考えましてな」

ディエスは驚き呆れ果てて言葉もでなかった。ケルマディクはポルメリアの活躍で滅亡を免れたのではないか。それなのに、アンゲルウルプからの援軍要請を彼女に振るとは、一体どういう事なのだ？

その一方でディエスは彼女の答えも知っていた。

「承知いたしました。アンゲルウルプの都市魔術師殿とは浅からぬ縁。喜んで助勢に参りましょう」

彼女は悪魔たちとの戦いに生き甲斐を感じている。自分が生まれてきた意味として捕らえているのだ。悪魔たちが蠢いている限り、彼女の戦いは続くだろう。

そう思ったデイエスはいてもたってもいられなかった。彼女と共に行き、その命の行方を見極めなくて何が伝記作者だろうか。彼女は自分の歌を必要としてくれた。ならば自分が彼女と共に行く事に何の問題もない。

立ち入りを禁じられている場所で、しかも立ち聞きをしていた無礼の事は忘れた。デイエスは、ただただ彼女についていきたいだけだった。

突然開いた扉に少年が立っている事に、防衛委員会の者たちは咎めるような訝しげな顔をする。ポルメリアだけが何もかも解っているような顔をしてデイエスを見ていたが、彼は気付かなかった。

「ポリー一人に行けというなんて無茶です。僕と一緒にいきます。僕の歌を聞いてポリーは悪魔たちをなぎ払いました。彼女には僕の歌が必要なんです！」

委員会の男たちは呆れた顔をしてお互いの様子を見ている。デイエスを見つめているのはポルメリアだけだった。

「本気なのね？」

彼女の清冽な藍色の瞳がデイエスの覚悟を試すように彼を見ている。デイエスは身を固くしながら力強く答えた。

「うん！」

「援軍として子供二人を送るとは・・・ケルマディクの体面も何もないな・・・」

苦々しい溜め息と共に禿頭のクラーテンが呟く。そんな盟友にレーヴェンスは囁いた。

「仕方あるまい。我々として最優先しなければならないのは、逃げた悪魔たちの追撃だ。

二度とケルマディクを襲わせない為にも必要だ。

可能なら連中の根拠地になっているメルクス方面に進撃すれば、結果としてアンゲルウルプ正面の敵に対する牽制になるだろう。双方の利益になる。それに・・・」

レーヴェンスは楽しそうに言葉を続けた。

「あの二人を遊撃兵として使えば、五百の軽騎兵を送るより遥かに役に立つだろうさ」

それでもクラーテンの溜め息はつきなかつた。

「妻に責められるな・・・」

竈の女神の祭祀長を務める彼の妻がポルメリアを『家族』として気づかっているのは彼も承知している。顔を合わせば、きつとなじられるだろう。それを考えると頭が痛い。レーヴェンスは苦笑した。

「折りを見て細君には私からも言っておこう」

それで決まりだった。

出発はあわただしかった。

移動するのはケルマディクの政庁付き魔術師が用意する転移魔法を使用するので、ほぼ瞬時にアンゲルウルプへ到着する事が可能だ。

それでも、その日のうちに移動しようとするポルメリアは、人々への別れの挨拶もそこに少ない荷物を取りまとめた。

どうにかすると様々な魔法の道具を背負いのバッグに用意するディエスの方が準備に時間がかかるくらいだ。

ポルメリアは孤児院の人々に別れの挨拶を告げ、子供たちの可愛い抗議を背中に受けつつ、アルベルバルの工房を訪れた。彼は相変わらず炉に向かい、ポルメリアを一顧だにしなかった。

「間に合わせてくれてありがとう」

ポルメリアはアルベルバルの背中に深々と礼をした。

「なに、間に合わなかったら、こっちの命も危なかったからな」

がっきらぼうに彼が答える。

「私の愛剣は砕けてしまった。だから支払いがまだ残っている」

「知っているよ。だが手持がないんだろう？ツケにしておいてやるよ」

「旅暮らしの者は何時帰ってくるか解らない。だからツケはつけない。前にそう言っていたが・・・」

「じゃあ、お前、今すぐ払えるのかよ」

「申し訳ないが、無理だ」

「じゃあ、ツケにするしかないな」

下らない事を聞くな、というようにアルベルバルは背中を向け続ける。ポルメリアはその老いた背中を見続けた。

「払えないかも知れない」

「何言っているんだ。お前は律儀で馬鹿正直で、約束は必ず守るトンチキ野郎だ。いや、女だから野郎はおかしいか。」

まあ、お前の性格はお前以上に知っているつもりだ。お前から代金を回収しそびれるなんて事はねえよ」

「それでも、できないかも知れない」

二人の間に沈黙が降りた。その可能性はいつだってあった。だからこそアルベルバルはツケでは仕事を引き受けない。今度は極めつけだ。悪魔の軍勢の他に三万の諸族の軍勢が襲い掛かるアンゲルウルプ。それを救援しに行くのだ。いや、それだけではない。彼女の戦いは最後の悪魔をテッラムリアから叩き出すまで続くだろう。

少なく見積もっても二万四千の悪魔が、このテッラムリアで蠢いている。それらを全て滅ぼすまで彼女の旅は終わらない。終わる事はない。

沈黙を破つたのはアルベルバルだ。彼女に背中を向けたまま、掠れた声で突き放すように怒鳴った。

「お前は『善』なる軍神に仕える騎士なんだろっ！借金を踏み倒す事は悪しき事じゃねーか。だったら、這ってでも戻ってきて、借金を清算しなっ！」

「・・・それでいいのか？」

「いいも何も、お前は今、はした金しか持ってねえんだろ。主義に反するが仕方ない話だ」

言葉を失ったポルメリアはしばらくアルベルバルの背中を見つめた。

何というのか、言葉にならない感情が溢れてきて、何を言えいいのか解らない。

先ほどの重苦しいものとは違い、暖かい沈黙が二人を包んだ。溢れる感情を押しさえ込んだポルメリアは、やっとの事で口を開く。

「解った。悪魔の軍勢をなぎ払い、この戦いが終わったら、利子をつけて返してくるわ。それまで貴方も、元気で。」

ありがとう……」

工房から清冽な淡い光が消える。扉が閉じる音が聞こえる。

それでアルベルバルはポルメリアが次なる戦場へ向かって旅立った事を知った。

「利子をつけてか、できもしねえのに。」

だが冗談が言えるようになったと褒めてやればいいのかな」

作業をしていた手を止め、アルベルバルは深い溜め息をついた。

彼にとってポルメリアは孫娘のような物だった。

ふらりとやってきて大金を目の前に置き、その金に見合う剣や鎧や、盾をつくれ、と依頼してきたのが最初だった。あれから三年余り。ポルメリアは今や悪魔の軍勢と渡り合えるような剣士になっている。軍勢とだ。

彼の長い人生において、巡り会った中でも最年少の、そして最強の剣士。

その彼女の手に馴染むように丹精こめて、悪魔の諸君主さえも殺せるような破邪の剣を鍛え上げた。

もはやそれ以上の仕事をする事は望むべくもないだろう。

彼は再び溜め息をついた。満足できる仕事を終えた達成感と、

その為に彼女が文字通り地獄の戦場へ赴く事を思いやる喪失感が混じっていた。

最後に彼は毒付いた。

「結局、最後の最後まで自分の剣に銘をつけていきやがらなかったな。

あの罰当たりめ。もう二度とあんな奴の剣など鍛えてやるものかっ」

鍛えないのではない。鍛える必要などないのだ。彼女に与えた白金の剣以上の剣など、もうアルベルバルには鍛えられないだろう。彼も歳だ。それに、これほどの思いを一人の剣士にかける事は、もう二度とあるまい。

「運があれば、代金、回収できるだろうよ……」

自分に言い聞かせる言葉が空虚に工房に響き、彼は再び作業に没頭していった。

天使の眷属たる『善』なる軍神の騎士は行ってしまった。彼はただ、自分の仕事に戻るだけだ。

彼はもう独り言を呟かなかった。